

LETTER

GraSPP
THE UNIVERSITY OF TOKYO

Contents

- 1ページ 2017年修了生のメッセージ(栞田 かおり/川島 佑介)
- 2ページ My Memorable Trip to Paris (Ilia Beloly) / GraSPPオリンピック2017(後藤 啓人)
- 3ページ 留学生インタビュー(第8回)(Lisa Hartwig)
- 4ページ International Field Workshop (西沢 利郎)

「2017年3月修了生のメッセージ」



2016年度国際公共政策コース
修了 栞田かおり

人との出会いと経験に恵まれた、あっという間の2年間でした。受験していた頃の不安な気持ちを今でも昨日のこのように思い出します。まさか自分が卒業後今これを書いているシカゴに住み働くことになるとは思っていませんでしたが、GraSPPを卒業し海外で働くという夢が叶いました。

GraSPPでの2年間は、国際色豊かで様々な経験ができました。コロンビア大学国際公共政策大学院(SIPA)とのダブル・ディグリープログラムに参加できたことは非常に大きく、それぞれの良さを体感することができました。また、ペルーリマで開催されたAPECにも日本人学生代表として派遣して頂き、国際社会の中での日本人という立場を、身を以て体感することができました。

学生生活でなによりも印象に残っているのはグループワークです。文化や考え方の全く異なる学生たちと限られた時間のなか意見をすり合わせ、できる限りのアウトプットを出す、これほど難しいことはありませんでした。グループワークで貢献できていないのではないかと不安に

なっていたことがありましたが、あるチームメイトから「あなたのおかげでチームがまとまって、理解の食い違いがなくなっている」と言ってもらえた時に、私らしく、日本人らしく貢献することもできるのだ、と自信ができました。

GraSPPは声をあげて自分が動けば、それを実現できる場所です。欲を言えば、もっともっと色々なことができたのではないかとと思うくらい、GraSPPはチャンスに満ち溢れた場所でした。型にはまったキャリア形成や人生プランに捉われず、興味がある方は是非チャレンジして頂きたいです。新校舎を使えなかったことが唯一心残りなので、これから入学される方のキャンパスライフが羨ましいです。今後は修了生として、縦の繋がりの強化に尽力できればと思います。ここまで応援し、支えてくれた両親、教職員の皆様、上司、友人達にこの場を借りて感謝申し上げます。



法政策コース2016年度修了
川島佑介

3月に法政策コースを修了し、4月からは総務省行政管理局の職員として働いています。学部で卒業論文を経験していない私が、研究論文を執筆し無事に卒業することができたのは、講師の先生方や学友に恵まれたおかげであり、GraSPPでお世話になった全ての方に心から感謝申し上げます。

2年前、当時所属していた法学部での座学中心の講義が肌に合わなかった私は、実務家の講師からより現実に即した双方向的な授業を受けることができるという点に魅力を感じ、GraSPPへの進学を決めました。しかし、実際にこの2年間の経験を振り返ると、私にとってのGraSPPの価値は、実務への近さというよりも、寧ろ講師や学生のバックグラウンドの多様さであったように思います。GraSPPが学問の枠に捉われない横断的な学びを目指しており、多様な授業や講師のラインナップを揃えていることは承知していたのですが、いざ授業を受けてみると、自分と専門が全く異なる学生と交流する機会が想像以上に多いことには驚かされました。法科大学院の方から原子力関連の研究をされている理系の方、民間企業から来ている社

会人学生の方に日本に留学に来ている東南アジアの公務員の方まで、様々な方と議論をする機会があり、私自身の興味分野・視野を広げるきっかけを多く与えてもらいました。総務省という職場を志したのも、ひとつの専門分野を徹底的に突き詰めるというよりは多様なアクターと接点を持ちながら俯瞰した視点で仕事をしたいと思ったことが理由のひとつにあり、社会人として働く中でもGraSPPで培った価値観を大切にしていきたいと思っています。

私なりにGraSPPで学んだことを振り返ってみたものの、社会人としては漸くスタートラインに立てたという段階であり、学びの成果が試されるのは寧ろこれからであろうと思います。視野を広くもって仕事をするという初心を忘れないためにも、GraSPPで育んだ講師の先生方や学友との繋がりを大事にし、今後も互いに影響し合いながら切磋琢磨していきたいです。

My Memorable Trip to Paris

Ilia Beloly, MPP/IP 2nd Year

My trip to Paris started at GraSPP Policy Challenge introduction seminar. During introduction, all our hopes to form team with friends and work on desired topic was destroyed by Professor Shiroyama, who enthusiastically explained the system of random team composition. However, two words popped up in my mind: “チャレンジ” and “がり勉”. I decided that it would be an interesting chance to meet new GraSPP people, so I signed in. My team members were from Peru, Japan, China – and me from Russia. I didn't know any of them, so at first meeting I was trying to speak less in order to look smarter. Our team chose the topic on Sexually Transmitted Diseases and Sexual Education as we believed that topic is not getting enough attention from policymakers. Our next challenge was how to suggest truly innovative solution that will be attractive enough to send us to Paris. At that time, I was surprised when my team members humbly concluded there are no thoughts, but during two hours of enforced one-to-one brainstorming they generated many brilliant fresh ideas.

Before the GraSPP presentation, we felt our topic in one way or another would shake up the jury, and we strongly believed in our idea; so we were able to defence. However, we were not sure about jury's attitude to our topic. Presentation went fine, but we knew that competition would be fierce; so when in late December, as a Christmas gift, we received a congratulation letter to inform that we were chosen to make a presentation for GPPN Conference at Science Po in Paris, we were overdelighted.

Upon arrival, we were warmly greeted at Science Po by volunteers, totally charmed by Science Po Graduate School of Public Policy Dean's English accent, thrilled by a conference moderator, and overall, excited. More than 50 teams from all over the world presented their projects, which varied in policy area and level of execution. For me, most interesting was reading the short biographies of all team members in the Conference brochure. As usual, I compared my own achievements in life with others', and that plunged me in abyss of depressive self-abasement (joke) – it motivated me to network actively and try to learn from others' experience. After first day, our team was selected for the next stage, so that evening we had to further prepare for the longer presentation and possible questions. Because of that, we were unable to benefit from an evening social program organized by Science Po student council; but it let us develop our project, and we felt the responsibility since we were the only team chosen from GraSPP. The next day, the project competition was more about implementation and feasibility of the project; so the strongest one deservedly got the first prize. Nevertheless, we were delighted that our project, even though just in a concept stage, was highly evaluated and we were given a chance for the Final. That evening was highlighted by a networking party, where we surprisingly spent most of the time chatting with unexpectedly friendly Dean Iizuka. (Yes, he is also human as us).

Looking back, we had amazing days in Paris, as we met many new interesting people, got fresh “outside of Japan” view on the policymaking dialogue; but more importantly, we connected better with GraSPP members. Finding way from hotel to Science Po on a first day, taking an evening boat trip on la Seine, lunchtime tour to Jardin du Luxembourg, asking too many questions at OECD headquarters – all that great memories that I cherish are inseparable from my fellow GraSPP students who were there with me. I believe events like this are working positively on building deep connections between professors, present students, future alumni; and this is essential for our young but brilliantly shining department.



GraSPP オリンピック 2017 開催

MPP/IP 1年 後藤啓人

ブラジル・リオ五輪が日本人の記憶から徐々に薄れ、次の東京五輪まで残り3年となり、桜が満開となった4月4日、本郷キャンパスの御殿下記念館には朝から大勢の新入生や外国人留学生の姿であふれかえっていました。GraSPP学生自治会による新入生歓迎と留学生交流を兼ねた行事、GraSPPオリンピック2017に参加する学生たちです。オリンピックとは名ばかりで、競技は綱引き、玉入れ、大縄跳びの3種目。日本の新入生には童心へ返ってもらい、留学生には日本の小学校の運動会で実施さ

れている競技に関心を持ってもらうという狙いでした。

第1種目の綱引きで試されたのはチームワーク。自然にリーダーシップを発揮する者もいれば、力を発揮してチームに貢献する者もいるなど、各チームは勝利に向けて頑張りました。第2種目の玉入れで求められたのは戦略。趣向を変えて各チームから選ばれた1名が籠を背負って逃げ、残りのメンバーが追いかけて玉を入れるというスタイルにしました。小学生がやれば可愛げもあったでしょうが、20歳すぎの大人だと現場は戦場です。籠を背負う者がサーベルタイガーの如く押し寄せるメンバーから必死に逃げる姿は、自然界の弱肉強食の摂理を彷彿とさせます。玉は砲弾の如く籠を背負う者に降り注ぎました。見かねた学生自治会がルールを途中で一部変更し、怪我人を出す事態はからくも免れました。最終種目の大縄跳びで求められたのは阿吽の呼吸。初めて顔を合わせた面々が息を合わせて一斉に飛ぶのは至難の業。それでも3分以内に40回以上連続で飛んだチームもありました。

優勝したチームへの賞品は、午後から実施されたポリシーチャレンジの議題優先選択権であり、午後からはみな体ではなく頭を使いました。

留学生 インタビュー

第8回

Lisa Hartwig

(MPP/IP 2年)



2016年10月、1ヶ月間来日したお母さんと

—将来はどのような仕事に就きたいですか？

アジア開発援助の仕事をしたいと思っていますが、その前に社会人としての経験を積み、専門分野に磨きをかけたいと考えています。たとえば、ADBの職員の平均年齢は39歳だそうです。そこにいたるまでのあと10年くらいで、何か強みとなる専門分野を身につけたいな、と。いま考えているのは、女性のエンパワーメント、とくにリプロダクティブ・ヘルス／ライツ (Reproductive Health/Rights: 性と生殖についての健康と権利) です。1年くらい前に、国連人口基金でインターンをしてから、これらの問題の重要性に目が覚めました。それまでは経済等に目が向いていたのですが、それ以前にこういった問題にたいする知識や教育がないと、経済問題も解決できないことがわかりました。GraSPPだと、この問題について学べる科目があまりないのが残念です。授業の課題で、自分で調べてレポートにまとめたことはあるのですが。

修士論文も書きます、女性の権利と少子高齢化問題はつながっていて、結果的に日本の安全保障のリスクになる、という主旨です。指導教員はHeng先生ですが、このふたつの問題のつながりを見つけるのが難しく、悪戦苦闘しています。最近、家だと何もしないので、1日12時間くらい大学にこもって論文を書いています。週末も土日のどちらかは大学の図書館で過ごし、もう片方は自宅近所のカフェで論文に取り組んでいます。たまに2時間くらいぼ〜っとしちゃうこともあります。

—お父さんはアメリカ人、お母さんは日本人で、サウジアラビアで暮らしたことがあるとか。

お父さんの仕事(石油会社)の関係で、2002年までサウジアラビアで暮らしていました。生まれはシカゴです。アメリカに帰国が決まったときに、わたしは大学受験のこともあり、スイスの全寮制学校という選択肢もあったのですが、家族と離れるのがいやで、一緒にテキサス州オースティンに帰ってきました。サウジアラビアで暮らしているあいだは、ふだんはアメリカ人学校、夏休みのあいだは日本人学校に通っていました。

ふだんはお父さんとは英語、お母さんとは日本語で話しています。わたしはお母さんが大好きです。お母さんともっと深くコミュニケーションをとりたいと思って、上智大学に半年間留学して日本語を学びました。2010年のクリスマス、イリノイ州のお父さんの親戚を訪ねてゲームをやったことがあります。そのとき、お母さんは緊張して英語でものを考えられなくなり、わたしたち姉妹に気持ちを伝えられなくて、そのゲームだとお母さんチームがいつも負けていました。私たちが“Mom, when we are on your team, we always lose!”と文句を言ったら、お母さんが“Sometimes I just don't want to speak English.”と答えたんです。そのとき、お母さんが歳をとって英語を忘れちゃったときに、しっかり育ててもらった私たちが日本語で恩返しできないのは悲しいから、日本語をきちんと覚えようと決意しました。

お母さんは3ヶ月間パナマに行ってスペイン語を学んでいます。将来的にはパナマに移住して第二の人生を送ることも考えているみたいです。テキサスから近くて移動も楽なんです。お父さんは石油会社を退職したものの、家に毎日いるとお母さんも世話が大変なようで、お父さんは1月から6月まで内国歳入庁でアルバイトして、7月以降はパナマでお母さんに合流したりしています。



家族写真 上:2003年頃、下:2014年

International Field Workshop

特任教授 西沢利郎

「公共政策大学院(GraSPP)は世界の縮図」。これは私が大学院を紹介するときの決まり文句です。ここ数年の国際化の進展は劇的といえるほどで、教育プログラムは世界展開し、「International Field Workshop (IFW)」も高度化しています。私自身の慣れや工夫もありますが、何よりも、それに応えてくれる学生の存在が大きな背景です。今年1月末から実施したIFWの様子を振り返ります。

GraSPPの5名を含め、研究科・専攻が異なる11名の多国籍学生チームが米国東海岸を訪問しました。初日はワシントンDCのブルッキングス研究所北東アジア政策研究センターでリチャード・ブッシュセンター長、ミレヤ・ソリス、ジョナサン・ポラック両上席研究員とのセッション、さらに国際通貨基金(IMF)スタッフやオピニオン雑誌The Atlanticのステーブ・クレモンズ編集主幹との意見交換と続きました。翌日は世界銀行で医療保険制度、持続可能な開発目標(SDGs)と教育、電力セクター改革など多彩なテーマについて議論した後、アナ・レヴェンガ世界銀行グループ副チーフエコノミストと研究と政策への貢献について意見交換しました。締め括りとなる小口一彦日本代表理事との面談では、世界銀行でのキャリアを夢見る学生に励ましの言葉をいただきました。

ネットワーキングも重要な活動です。世界銀行に勤務する卒業生ニコル・アヤ・コナイがハッピーアワー交流会を企画してくれました。様々な機関で活躍するプロフェッショナルとの懇談でモチベーションを高めることができました。

米大統領エイズ救済緊急計画で中心的な役割を演じたアンソニー・フォーチ国立アレルギー・感染症研究所所長との意

見交換は奇跡のような出来事でした。ニューヨークに移ってからの国連教育科学文化機関(UNESCO)事務所でのセッションも、国際平和研究所でのヒメ



ナ・レイバ・ローシュ上級政策アナリストを交えた気候変動の緩和・適応を巡るグループ討論も刺激的でした。

IFWは、単なる研究所・国際機関訪問ツアーではありません。学生達は事前にテーマを提案し、選抜された者だけが準備して参加します。訪問希望先に依頼状を送り、受け入れが決まるまで心配しながら待つのです。担当学生がチームの代表として進行役を務め、議論をリードします。

IFWは国際展開の一例にすぎません。GraSPPは、グローバル公共政策ネットワーク(GPPN)のメンバー校として、コロンビア大学国際公共政策大学院、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、パリ政治学院、リー・クアンユー公共政策大学院ほかとの交流やダブル・ディグリープログラムなどを年々拡充しています。毎年秋に開催されるAPEC Voices of the Futureへの学生チーム参加も定着しつつあります。

こうした活動をへて巣立っていくGraSPPersは、世界中で活躍してくれるはずで。さあ、そろそろ8月のIFWアジアへ向けた準備が本格化します。



編集後記

後藤さんがユーモアあふれる筆致でレポートしてくれたGraSPPオリンピック、実際に見てきました。オリンピックといいつつ競技は小学校の運動会のもの、というギャップがまた愉快。とはいえ、小学校の運動会競技と侮るなかれ、参加した学生はみんな真剣です。個人的に一番面白かったのが大縄跳びでした。外国には大縄跳びどころか、縄跳びもないのでしょうか。外国人学生は、最初は目を丸くして大人数が一斉に飛ぶ奇跡(?)を観戦、いざ自分たちの番になると嬉々として真剣に縄を回し、空高く跳んでいました。仲間に入りたいたいなあと思いつつも、若者の足を引っ張つたらいかん、と自制しました。(編集担当)

vol. 48 NEWS LETTER

【編集・発行】東京大学公共政策大学院 【発行日】2017年6月13日

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp
http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/